
学園支配者生徒会物語

大豆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学園支配者生徒会物語

【Nコード】

N4461P

【作者名】

大豆

【あらすじ】

生徒会に支配された学校。

その生徒会に立ち向かうため、男は立ち上がる。

プロローグ

この学校は支配されている。この学校はおかしい。この学校は、異常だ。

この学校を支配しているもの、それはたった五人。そう、たった五人なんだ。たった五人の……

『生徒会』

そのキーワードを聞くと、なにも変には思わない。むしろ、ただの生徒会に反発しているものかくらいの印象しか持たない。しかし、違う。

支配の規模がおかしいのだ。普通の生徒なら、中には生徒会の存在は知っているけども、そんなにしらない。生徒会はそんなに重要ではない、と思っているものも少なくないだろう。しかし、この学校は違う。教師は全員、生徒は九割以上が生徒会を神のように崇めている。崇めないものは生徒会によって始末される。こんな学校が正しいのか？ そんな生徒会で正しいのか？ そんな疑問を持つ俺は生徒会に對抗意識を持っていた。幸い、力は強く生徒会の信者、つまりただの生徒につかまりそうになっても切り抜けている。俺の味方は現在一人。斗辺^{とべ}流依^{るい}、俺はトベルとよんでいる。というか本人の要望で呼んでいる。

生徒会役員は五人。会長、副会長、会計、書記、書記。会長の顔は誰一人知らない。いや、生徒会役員ならば知っているのかもしれない。それでも、俺は知らない。

その生徒会はまだ、少しではあるが学校の外、この町、月下町にまで手を出しつつある。このままいけばおそらく、支配されるのだろう。そんなありえない話、だれも信じない。誰に言っても、無駄。

だから俺は、俺とトベルは少数派なりに戦おうとしている。

この学校の生徒会。それはもう、バケモノだ。

信者

俺は相沢。

俺のように、生徒会にたてつく少数派はこの学校で生きていくのは難しい。いつ襲い掛かられるかわからない。教師も生徒会に支配されているから授業中でも、どこでも、自由に襲い掛かってくるだろう。だから俺はマトモに授業を受けることはない。授業中だと相手はクラスメート全員、さらに教師を含め大量になる。そんな大勢とマトモにやりあう気はない。休み時間ならば少しとはいえはらける。少数なら俺でも大丈夫だ。

授業中、俺は廊下をうろついていた。授業中に廊下にいるやつなんてほとんどいない。いるとしたら見回りか、俺と同じ生徒会にたてつく少数派か。

すこし歩き、廊下に人影を見つける。同じ少数派であるトベルだ。「生徒会に関する情報、手に入ったぜ？」

トベルから声をかけてくる。トベルと俺は手を組み、生徒会に對抗する術を練っている。

「生徒会の奴ら、やはり催眠的なもので生徒達を操っているっぽいぞ」

「催眠？ そんなものありえるのか？」

催眠なんて、マジックみたいな単語に俺がきく。

「催眠を馬鹿にするな。あなたは眠くなるみたいなのはさすがに難しいが、簡単な催眠もある。口車に乗せる、というかなんとか」

「ああ。商品に限定とか特別とかついてたら買ってしまうようなもの？」

「ちよつと違う気もするが結局はそうだ」

少しは理解できたと思う。

「さて、生徒にかかっている催眠を解きたいものだね。生徒が生徒会の見方だと何かと動きづらい」

「ああ、そうだな。とく方法は？」

「漫画とかの催眠とは違うんだ。催眠をかけた奴を倒したら解ける、とか都合のいい話はない。催眠の上から、さらに催眠をかけるか、正気に戻すか。それくらいでしか俺らの味方にはならないだろう」

「ほう、めんどくさいな」

素直な感想を言った。

「ああ。それに、今生徒になんか言っても聞いてもらえないしな。あと、もう一つだけ方法がある」

「ほお、それは？」

「それは、生徒にシヨックを与える方法。これは漫画とかの催眠に近いとき方だな。ほら、倒したらそいつにかかった催眠が解けたりするだろう？ そんな感じだ。とにかく、気を失わせるか、そこまですないでもある程度強い打撃を与えるだけで解ける。それは、喧嘩の得意なお前にとっては楽なんじゃないか？」

「ふむ、たしかに。力づくでなんとかなる話なら光が見えてくる」

「だが、さすがのお前でも大人数と一気にはできないからな。こつこつとっていく形になる。大丈夫か？」

「ああ、大丈夫だ。でも、最初に役員を倒すつてのはできないのか？」

「？　なんでだ？」

「いや、役員を倒せばそれを崇めてた奴らも少しは尊敬の念を薄めるんじゃないかと思つてね」

「うむ、むずかしいだろうな。役員の周りには生徒が大量にいるだろう。どうせそれにやられて終わりだ。せめて一対一がいい」

「確かに、それがベストだな」

キン、コン、カン、コン。チャイムがなった。俺とトベルは一旦解散する。このままでは廊下も人であふれる。

さすがに奴らも、見つけたらすぐ襲ってくる、なんてことはしない。俺が反発する態度を全面的に押し出したときだけ襲ってくる。そう考えると授業も平気そうだが、教師は授業中、生徒会話をす

ることが多い。それに反発したとたんに襲われる。

生徒から少しずつ倒していく。

それが本当にできるのかわからない。

いや、できる。

そう、信じるしかないんだ。

俺らには、信じるしかない。

【現在、生徒会役員を含まない生徒、1032人】

信者（後書き）

短編、なくなっちゃった！ テヘ！

と、冗談はさておき大豆です。

なんとなく学園は好きなので出してみました。
あと、いろいろと。

テスト、そして。

もうすぐテスト。俺は授業に出ないからテストも危ない。卒業で
きるかも危うい。

「俺が教えてやろうか？」

トベルが言ってきた。

「お前、勉強できるのか？」

「暇つぶしにやっているからな。簡単だ」

俺とトベルは勉強を開始した。

「とりあえず、数学はとことん問題集でもやってる。国語は教科書
見ながら問題集でもやってる。理科・社会は教科書見て、音読して、
問題集でもやってる。英語は……イギリスでもいったらどうだ？」

「なんて適当な！」

「俺だって面倒なもの」

一週間後。テスト当日。

「相沢、どうだ？」

「今の俺なら東大にも受かる気がする」

「すごいなそれは」

「んじゃ、いこうか。トベル！」

「違うクラスだぞ」

「……どうだった？」

「あ、微妙だ」

「……フッ」

「笑うなや。お前はどんなんだ？」

「今日のはまだ帰ってきてないからわからんが、成績で言つとこの
学校で4番目くらいだ」

「すごいぞそれ」

数日後、テストがかえってきた。まあ、いままでの俺よりはよかった。順位で言うと、1038人中、390位。そう考えるとけっこういいんじゃないか？

「君」

後ろから声をかけられる。振り返るとソコに見知らぬ男が居た。

「こんにちは。はじめまして、だよ。僕は、この学校の生徒会長だ」

「！」

「いまはまだ、闘いするときではない。でもいつか、戦いときは来るんじゃないかな。フフ、楽しみにしているよ」

そいつって立ち去った。

まだ、目標の達成は遠い。それでも一步步、足を進める俺がいる。

こんな学校、支配し返してやる！

テスト、そして。（後書き）

はい、打ち切りです。続けることが難しくなりました。まだあんな
り伏線をだしていなくてよかった。

またいつか、同じような話を書くかもしれません。その時は短編で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4461p/>

学園支配者生徒会物語

2010年12月25日03時40分発行